

2007. 9 Vol.9

岐阜県現代陶芸美術館
Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

CERA・PA

セラ・パ

〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5
tel.0572-28-3100 fax.0572-28-3101
<http://www.cpm-gifu.jp/museum>



「じゃんけんぽんの考え方ー勝ち負けのない共存」

中欧の現代陶芸ーハンガリーとチェコを中心にー

孤高の天才陶芸家ー岡部嶺男展に寄せてー

こどもたちと美術館をつなぐために

特集

次回開催

企画展

教育普及
活動報告

韓国・台湾・日本協同企画 アジア陶磁デルタプロジェクト

「じゃんけんぽんの考え方ー勝ち負けのない共存」

Asian Ceramic Delta—Korea,Taiwan and Japan

『ゲー・チョキ・パー』 — それぞれが違う手をだせば、あいこになる。それぞれが独自の個性を示すこと、それが共存の方法だと考えた。

21 世紀に入り、利川（韓国）、鶯歌（台湾）、岐阜（日本）の 3 地域で、陶芸専門の展示施設が相次いで開設され、国際的な規模のコンペティションが行われるようになりました。この数年間に、世界中の陶芸愛好家らが訪れ、陶芸家らも行き交うようになり、それぞれのやきもの文化はリアルタイムで発信されつづけ、活況を呈しています。

このような状況に対応するように、今後の更なる発展と協働、共存を目的として、財団法人国際陶磁器エキスポと台湾県立鶯歌陶瓷博物館、岐阜県現代陶芸美術館は陶磁文化協定を締結しました。アジア 3 地域の陶磁文化の相互理解と交流の推進を目的に、陶磁文化交流プロジェクトを開始し、最初の第一歩として、それぞれのやきものの現況を紹介する巡回展を開催することにしました。

論争やゲームで決着が付かない場合、西欧社会では、コイン投げという「裏か表か」の二者択一の方法で決定します。しかしアジアのこどもたちの間でも行われているジャンケン、ゲー・チョキ・パー。相手次第で、勝ちにも負けにもなり、また「あいこ」になる場合もあります。共存の方法としてのジャンケン・コードを選択し、巡回展のタイトルを「じゃんけんぽんの考え方ー勝ち負けのない共存」としました。

純粋な造形志向の作品、伝統的な技術による作品、食文化が反映された実用性のある作品、ライフスタイルの変化に伴うデザイン作品など、年齢、性別、志向にこだわらずやきものの混沌とした様相を紹介します。作家の選出には、各地域とも、3 施設のキュレーターがそれぞれの地域を訪れて、作家にインタビューし決定しました。既に準備段階から多くのコミュニケーションが取られています。

巡回展による 3 施設からの発信は、アジア伝統芸術文化であるやきものの現状と、アジアに根ざす補完関係のあり方を世界に示す機会となるでしょう。

（学芸員 高満律子）



Envoys (2005) 張山 (台湾)

開催期間	2007 年 10 月 13 日（土）—2007 年 12 月 16 日（日）＜62 日間＞
会場	岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリー I
休館日	月曜日（ただし月曜日が休日の場合は翌日）
開館時間	午前 10 時～午後 6 時（入館は 5 時 30 分まで）
観覧料	一般 800 円（700 円）、大学生 600 円（500 円）、高校生以下無料（ ）内は団体 20 名以上 ※11 月 3 日（土）文化の日は、観覧料が無料です。
主催	岐阜県現代陶芸美術館
共催	財団法人世界陶磁器エキスポ(韓国)、臺北縣立鶯歌陶瓷博物館(台湾)
助成・協力	財団法人 地域創造、（財）田口福寿会、東濃信用金庫 財団法人廣達文教基金會、遠雄企業園
後援	駐日韓国大使館 韓国文化院
講演会	2007 年 10 月 13 日（土）14：00—15：30 題目／「ジャンケンから見たアジアの新しい文明」 講師／李御寧（イ・オリョン／韓国初代文化相） 場所／セラミックパークMINO国際会議場、定員150 名、聴講無料 参加申込方法／ご氏名ならびに「10 月 13 日の講演会希望」とお書きになり、FAX、はがき、e-mail にてお申し込みください。定員になり次第締め切らせていただきます。 宛先／高満津子（コウ・ミツコ） 岐阜県現代陶芸美術館 〒507-0801 岐阜県多治見市東町 4-2-5 fax:0527-28-3101 / e-mail:museum.1@cpm-gifu.jp

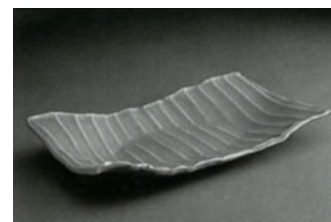
出品作家 韓国／方徹柱 (Bang, Chul-Ju 1922 年生)、金益寧 (Kim, Yikyung 1935 年生)、申相浩 (Shin, Sang-Ho 1947 年生)、張震 (Jang, Jin 1950 年生)、李仁鎮 (Lee, In-Chin 1957 年生)、李侖信 (Yi, Yoon-Shin 1957 年生)、李起助 (Lee, Gee-Jo 1959 年生)、金相萬 (Kim, Sng-Man 1967 年生)、金眞卿 (Kim, Jin-Kyoung 1968 年生)、孫珉永 (Son, Min-Yong 1969 年生)、崔智範 (Choi, Ji-Man 1970 年生)

台湾／孫超 (Sun, Chao 1929 年生)、楊元太 (Yang, Yuan-Tai 1939 年生)、蔡榮祐 (Tsai, Jung-Yu 1944 年生)、陳正動 (Chen, Cheng-Hsun 1957 年生)、陳美華 (Chen, Mei-Hua 1958 年生)、陳永釗 (Chen, Yung-Chao 1959 年生)、張清淵 (Chang, Ching-Yuan 1960 年生)、張山 (Chang, Shan 1960 年生)、施惠吟 (Shin, Hui-Yin 1961 年生)、邵婷如 (Shao, Ting-Ju 1963 年生)、廖瑞章 (Liao, Ray 1963 年生)、卓銘順 (Cho, Ming-Shun 1968 年生)、李宗儒 (Li, Tsung-Ju 1971 年生)、吳東杰 (Wu, Tung-Chieh 1971 年生)、施宣宇 (Shin, Hsuan-Yu 1974 年生)

日本／鈴木藏 (Suzuki, Osamu 1934 年生)、中村卓夫 (Nakamura, Takuo 1945 年生)、小川待子 (Ogawa, Machiko 1946 年生)、古川章蔵 (Furukawa, Shozo 1947 年生)、滝口和男 (Takiguchi, Kazuo 1953 年生)、前田昭博 (Maeda, Akihiro 1954 年生)、柴田眞理子 (Shibata, Mariko 1957 年生)、三原研 (Mihara, Ken 1958 年生)、青木克世 (Aoki, Katsuyo 1972 年生)、黒河兼吉 (Kurokawa, Kenkichi 1974 年生)、岡崎達也 (Okazaki, Tatsuya 1976 年生)



予知夢 (2006) 青木克世 (日本)



Conversation (2006) 李侖信 (韓国)

次 回 開 催
N E X T

中欧の現代陶芸 —ハンガリーとチェコを中心に

Modern Ceramics from Central Europe

—A Focus on Hungary, the Czech Republic and Greater Central Europe

2007年12月8日(土)～2008年3月28日(金)

いわゆる東西冷戦終結という体制転換から 20 年近くが過ぎようとしています。1989 年、ドイツというひとつの国を分断していたベルリンの壁が崩壊し、旧東欧諸国と呼ばれた他の国々でも一斉に社会主義体制が崩壊したのです。冷戦が終わりを迎え、資本主義と民主主義という名の新体制が広くヨーロッパを覆ったのです。現在では体制変換した国の多くが EU 加盟も果たしました。これらの国の中で、第二次世界大戦後「強制的に」ロシア（当時のソビエト連邦）の影響下におかれ、1989 年以降体制を変換したヨーロッパ中央部に位置する国々、とりわけポーランド、ハンガリー、チェコ、スロバキアは、現在では中欧と呼ばれています。

過去の体制下における中欧の陶芸家は制作する主題に制限が設けられていましたが、一方でその身分は保障されていました。しかし新体制は全てを自由にしてしまったため、身分保証もなくなり、格差社会が生まれてしまいました。かの国の陶芸家はこのような状況のなかで、社会に対する強いメッセージを込めた作品を制作する者や、器を基本とした新たな展開の仕事を見せる者など、活動の幅を広げながら自らの立ち位置を見つけようとしています。2005 年、そのような激動の時代を生きる中欧のアーティストの作品を紹介するための展覧会が日本でも開催されましたが、そこに展示されていたのは現代美術の作品で陶芸作品は見られませんでした。実際には、チェコでは早い時代に国際現代陶芸シンポジウムが開催され、ハンガリーではジョイナルやヘレンドといった歴史ある陶磁器工房を抱えていたにもかかわらず、これらの国の陶芸作品がまとめて日本で紹介されることはなかったのです。

本展では、中欧と呼ばれる国の中でも当館が所蔵するハンガリーとチェコの作家による現代陶芸作品、さらに過去にはそれらの国と一國を成していたオーストリア及びドイツの現代陶芸作品を展示します。日本人とは異なるバックグラウンドを持つ中欧の陶芸作品は非常に珍しいものとして私たちの目に映ることでしょう。しかし、これまで私たちにとって遠い国であったハンガリーやチェコの陶芸作品を通して、日本と中欧の共通点や相違点を見だし、相互に理解を深め、共生する未来を探る契機となれば幸いです。

(学芸員 岩井美恵子)

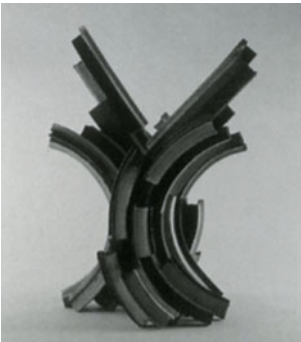
- 会 期 2007 年 12 月 8 日 (土) ～ 2008 年 3 月 28 日 (金)
- 会 場 岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリー II
- 開館時間 10:00 ～ 18:00 (入館は 17:30 まで)
- 休 館 日 月曜日 (休日の場合はその翌日)、年末年始 (12 月 29 日～1 月 3 日)
- 観 覧 料 一般 320 円 (260 円)、大学生 210 円 (160 円)、高校生以下無料
- * () 内は 20 名以上の団体料金
- 関連企画
- ・講演会「ハンガリー・ケチケーメート国際陶芸スタジオ滞在日記」
講師：松本ヒデオ (陶芸家、京都精華大学教授)
日時：12 月 8 日 (土) 13:30 ～ 15:00
場所：岐阜県現代陶芸美術館プロジェクトルーム
 - ・座談会「マグカップシンポジウム2007に参加して—チェコと日本の陶芸と日常—」
パネリスト：宇賀和子 (陶芸家)、正守千絵 (陶芸家)、吉川千香子 (陶芸家)
コーディネーター：岩井美恵子 (岐阜県現代陶芸美術館学芸員)
日時：12 月 15 日 (土) 13:30 ～ 15:00
場所：セラミックパーク MINO イベントホール
 - ・講演会「世紀末ハンガリーにおけるカフェ文化と芸術家たち」
講師：早稲田みか (大阪大学世界言語研究センター教授)
日時：3 月 8 日 (土) 13:30 ～ 15:00
場所：セラミックパーク MINO イベントホール
- * いずれも聴講は無料ですが展覧会観覧には別途観覧料が必要となります。
- ・ギャラリートーク
会期中毎週日曜日の 15:00 より当館ボランティアスタッフによるギャラリーツアーを行います。



エルズビエタ・グロッセオバ《権力》
1999年 岐阜県現代陶芸美術館



シュランメル・イムレ《座るミノタウルス》
2000年 滋賀県立陶芸の森陶芸館



リロ・シュランメル《サイクル「動線」No. 3》
1990年 岐阜県現代陶芸美術館



モニカ・デブス《無題》
2004年 岐阜県現代陶芸美術館

開 催 中
EXHIBITION

孤高の天才陶芸家 一岡部嶺男展によせて

副館長兼学芸部長
渡部 誠一

岡部嶺男（1919-1990、旧加納のち加藤、1978 年より岡部姓）は、近代陶芸史において、極めて優れた才能で知られる屈指の陶芸家である。しかしながら、これまで嶺男の陶業の全容を紹介しようとする展覧会は、生前 1981 年に開催された展覧会を最後に、没後そうしたまとまった形では、およそ四半世紀にわたって実現されなかった。この伝説の陶芸家が、陶芸界での極めて高い評価に比して、残念ながら一般にあまり知られていないのも故なしとしないのである。今回の回顧展は、その意味でも、待望久しいものと言えよう。

当館では、本展開催にあたって、作家が一般に知られる機会が少なかったことなどを勘案し、ご遺族に承諾を得て、広報媒体などに、次のような文字情報を呈した。

加藤唐九郎の
子として生まれ
中国官窯青磁に迫り
縄文のエネルギーを復活し
志野・織部を
我がものとした鬼才
いま
四半世紀の沈黙を破り
その全容に迫る

この文言にあるように、嶺男は加藤唐九郎の長男として生まれている。本稿冒頭に嶺男の二度の改姓について触れているが、これはまず旧姓名加納庄九郎であつ

た父が、嶺男の幼時、加藤唐九郎と改姓名したことに由来するものである。その後、嶺男は加納姓に戻したかったがかなわず、最終的に夫人の岡部姓に改めた。この改姓の事実だけでも、嶺男の人生の変転を窺うに足るものであろう。

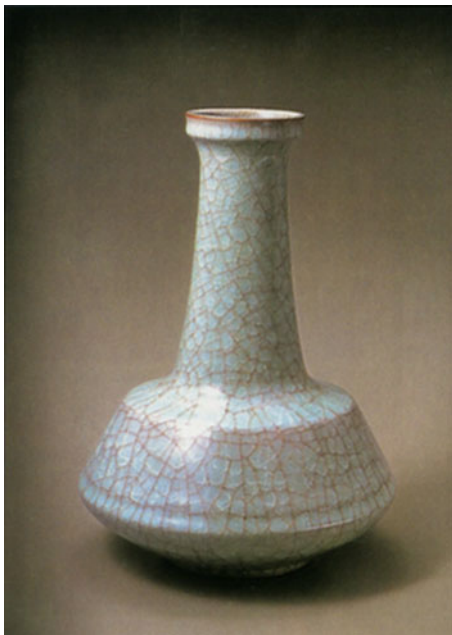
さてまたこの左記の文言に記したように、嶺男の陶業においては、まずその作域の広さに驚かされる。ここで私はその作域を四つに分けて紹介したい。

その第一は、灰釉や鉄釉を用いる古瀬戸をはじめ、さらに長石釉や銅緑釉などを加える志野、織部、黄瀬戸という美濃などの和陶を中心とする一群である。もちろん井戸や蕎麦、三島などその作域は和陶にとどまらず、広い研鑽のさまを窺わせる。この第一群の中で特筆すべきは織部である。自らも手がけた桃山写しを脱する総織部の作品群は、現代的な鮮やかな発色を呈して青織部と称し、大胆なカンナと篋使いによって、加飾と造形を一体のものとしている。これらは織部を桃山の文脈から切り離し現代に引き寄せたという意味で、先駆的な例である。

その第二は、昭和 37 年（1962）に、鉄釉を施した古瀬戸瓶子が紺黒に窯変したことを契機として挑まれた窯変天目の作品群である。昭和 62 年（1987）の「窯変嶺燦盃」を頂点とするが、この嶺燦の釉調は残された未完の作例で確認すると、すでに昭和 52 年（1977）頃にはほぼ達成されている。翌年の脳出血による半身不随によって、その完成は、さらにおよそ十年の歳月を経て後のこととなったことになる。自らの一字をとって「嶺燦（れいさん）」と名付けたその一盃は、まさしく満天の星砂が煌めいているかのごとくである。

その第三は、やはり昭和 37 年（1962）に、古瀬戸の試験焼で得られた青瓷風の試作品を契機として、翌年から本格的に始められた青瓷の研究の成果である。

嶺男の手稿には、「近世以前の亡びた瀬戸の火と土の伝統の再発見への努力が自分を支えた生きがいであつ



粉青瓷大鉢 1969 年



古瀬戸灰釉縄文瓶 1968 年

たように思へる。そして土の芸術の最後の姿が青瓷として現れた。これは中国に於ける、土器の最後の花として現れた宋官窯青瓷と同一の経路のように思える」（日本橋高島屋個展挨拶文手稿 1971）とある。

重要なことはまず嶺男青瓷が、南宋官窯などの写しを動機とするのではなく、古瀬戸などの灰釉系陶器の研究の結果、長い陶磁史を迫体験するかのように、青瓷の達成を成し得たということである。もひとつ重要なことは、嶺男青瓷の胎土は「古瀬戸の祖母懷土を洗練発達させたもの」（嶺男手稿 1971）などいわゆる土ものの陶土だということである。嶺男以前、我が国の青磁の胎土は磁土であった。我が国において土ものの青瓷は嶺男を嚆矢とするのである。しかも嶺男は極めて短期間に、粉紅瓷、粉青瓷、二重貫入青瓷、窯変米色瓷などを次々と完成した。

その第四は、縄文と叩きを駆使した極めて造形的かつ斬新な作品群で、昭和 29 年（1954）日展北斗賞を得て嶺男が頭角を現す契機となったものである。その後、縄文の表現は昭和 32 年（1957）、伝統工芸展出品以前まで続けられ、1960 年代後半には、さらに大胆に力強い造形を呈して再開されることになる。この縄文と叩きの表現は、加飾としては織部、志野、古瀬戸の他さらに青瓷なども横断するが、これは嶺男自身が、縄文の

極めてダイナミックな造形と構成の力を、静謐にして端正な青瓷探究の時代においてなお手放そうとしなかったということに他ならない。

嶺男の凄さは、ここに紹介した作域の全局面で、未踏のかつ岡部自身の表現を獲得しているということである。写しや習作を余儀なくしたかつての経験が、かえって厳しく独創の表現を、自らに求めたのである。

さて縄文と叩きを駆使する作品は、1954 年に初出と述べたが、奇しくも八木一夫は現代陶芸の出発点となった「ザムザ氏の散歩」を 1954 年に発表している。したがって「嶺男縄文」はもうひとつの「現代陶芸の原点」と言えると松山龍雄は指摘したが、慧眼である。50 年代から 60 年代にかけて、この二人の非凡な陶芸家は、鍛寄せ手や縄文など土でしかなしえない革新を果たして、この時代の沸き立つ現代芸術の動向に応じるのである。これにやや遅れてもう一人の天才加守田章二の曲線彫文などが続くことになる。

岡部嶺男の青瓷は、今日青磁作家を代表する一人とされる作家が「仰ぎ見る高峰のように感じた」と述懐するほどのものである。釉調は碧玉のごとくであり、小山富士夫が「郊壇以上のこまかい二重貫入」と評した見事な氷裂文が眼差しを夢幻に誘うのである。青磁は晴天の日の陽光の下で見るのが最も美しいと言われるが、岐阜県現代陶芸美術館では、岐阜会場だけの特別展示として、巡回作品とは別の粉青瓷と窯変米色瓷の二点を陽光の注ぐ展示室でご覧いただくこととした。

この特別展示は地元の所蔵家各位のご厚意で実現するもので他に巡回作品には無いものなども展示したが、その一つに永仁の壺事件の年の紀年銘とともに「捧小山富士夫先生」などと針彫された瓶子を紹介することができた。箱書には「灰釉昭和銘瓶」とあり、「昭和の作であって、鎌倉の作ではない」と語るのである。永仁の壺事件によって父と決別し、やがて夫人の岡部姓に改めることになった嶺男のさまざまな思いのにじむ瓶子である。



織部丸壺 1963 年



窯変嶺燦盤 1987 年

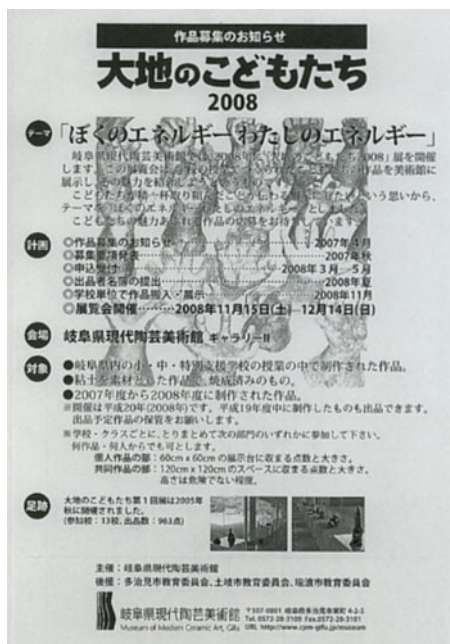
会 期	2007 年 7 月 14 日（土）～ 9 月 30 日（日）
会 場	岐阜県現代陶芸美術館 ギャラリー I
開館時間	10：00～18：00（入場は 17：30 まで）
休 館 日	月曜日（ただし月曜日が休日の場合は翌日）
観 覧 料	一般 800 円（700 円）、大学生 600 円（500 円）、高校生以下無料 （ ）内は団体 20 名以上
主 催	岐阜県現代陶芸美術館、NHK 岐阜放送局、NHK 中部ブレイズ、 中日新聞社

こどもたちと美術館をつなぐために

「大地のこどもたち 2008」展の開催に向けて

この展覧会は、岐阜県内の学校の授業でつくられた、こどもたちの焼き物作品を展示する展覧会です。2005年に開催した第一回展では、966点もの出品があり、「親子の鑑賞の場や美術教育の交流の場になった。定期的に開催してほしい。」という声をいただきました。

そこで、次回開催を2008年と設定し、教員と美術館職員による連携協議会を組織して準備を始めました。こどもたちが精一杯取り組んだことが伝わる展示にしたいという思いから、テーマを『ぼくのエネルギー わたしのエネルギー』としました。開催に向けて、各学校へ案内を送ったり、図工・美術の教育研究会の代表者会を通して、作品の制度や出品の依頼をしています。制作から展示・鑑賞・搬出まで、学校と美術館の連携が深まることを期待しています。



「ワークショップ2007」から「思春期のカタチ2007」展へ

中学生・高校生を対象にしたワークショップを、2007年7月28日（土）～29日（日）に開催しました。これは、収蔵作家を講師に招いて、作家とともに鑑賞し、作品を制作するという、こどもたちと作家をつなぐ催しです。今年度の講師は、鴨頭みどり氏。

講師の作品を鑑賞し、感想を交流しました。その後、作陶館に移動し、土を引き延ばしてできるひびや、土に刻んだ模様などを生かして、面や置物をつくりました。そして、化粧土や紅柄で着色して、面の表情や模様を効果的に表現しました。

ここで制作した作品は、講師の鴨頭みどり氏の作品

とともに、当館ギャラリーⅡにて開催の「思春期のカタチ2007」展（2007年10月30日（火）～12月2日（日））にて展示します。



鴨頭先生のワークショップ

鑑賞や学習のために

鑑賞ワークシート：こどもたちも楽しく鑑賞できるように、ワークシートを作成しています。岡部嶺男展用のワークシートでは、縄文の模様をつけるための道具を紹介したり、体験コーナーで感じたことが書き込めるように工夫しました。学校の鑑賞活動にも活用いただきました。

職場体験・博物館実習：中学生や高校生の職場体験を受け入れています。また、学芸員の資格取得のための博物館実習も受け入れています。

講演会：展覧会に関連して、講演会を開催しています。講師は、作家の友人であったり、研究者であったり、家族であったりします。（各展、関連企画を参照）専門性の高い講演で、作家や作品への理解を深め、地域の活性化に貢献していきたいと考えています。

その他、当館の代表的な収蔵作品について、写真と解説を載せた「鑑賞カード」や、企画展開催中毎週日曜日に学芸員が行う「ギャラリートーク」、資料価値の高いオリジナルソフトを閲覧できる「デジタルライブラリー」などで、来館者が自ら学べるようにしています。

高校生以下の観覧が無料となって3年目。こどもたちにとって美術館がさらに身近なところになることを願っています。

（学芸主事 加納礼爾）

展覧会スケジュール

	2007.10	2007.12	2008.1	2008.3
ギャラリーⅠ	じゃんけんぽんの考え方 ー勝ち負けのない共存 10月13日ー12月16日		前衛陶芸の諸相 12月23日ー2008年3月28日	
ギャラリーⅡ	国際陶磁器展美濃グランプリ 受賞者展 吉川周而 9月1日ー12月2日		中欧の現代陶芸 ーハンガリーとチェコを中心に 12月8日ー2008年3月28日	
	思春期のカタチ2007 10月30日ー12月2日			
	国際陶磁器展美濃グランプリ 受賞者展 井戸真伸 9月1日ー12月2日			

ギャラリーⅡ 常設展示案内

●第7回国際陶磁器展グランプリ受賞者展

The Winners of the Grand Prix

at the 7th International Ceramics Competition MINO, Japan

陶磁器デザイン部門グランプリ 井戸真伸 展示室 C・D

陶芸部門グランプリ 吉川周而 展示室 A

2005 年、セラミックパークを会場として開催された第 7 回国際陶磁器展でグランプリを受賞した 2 人の作家が、現代陶芸美術館の展示室で個展を開催します。翌年に開催される第 8 回フェスティバルへの布石として、それぞれの個性的な世界を展観します。

主催：国際陶磁器フェスティバル実行委員会

●思春期のカタチ (ワークショップ作品展)

Figures at the youthful age 2007 (Works from the workshop)

美術館では、夏休みに、中学生・高校生を対象としたワークショップを開催しました。思春期を迎えた子どもたちの力作を、今回の講師、鴨頭みどり氏の作品とともに展示します。

●中欧の現代陶芸ーハンガリーとチェコを中心に

Modern Ceramics from Central Europe

ーA Focus on Hungary, the Czech Republic and Greater Central Europeー

本展は、当館と滋賀県立陶芸の森が所蔵するハンガリーとチェコの作家による現代陶芸作品、さらに 20 世紀初頭までそれらの国と一国をなしていたオーストリアとドイツの現代陶芸作品を展示します。

●前衛陶芸の諸相

Avent-garde in Ceramics

戦後陶芸の動向として、大きな展開をみせた前衛陶芸の諸相を収蔵品によりみつめていきます。



フェスティバル個展
吉川周而 《のめずりこむ》



フェスティバル個展
井戸真伸 《hanahana》



中欧の現代陶芸
フェクテ・ラースロー (エンパイア・ステイト・ベッセル)



中欧の現代陶芸
エルズビエタ・グロセオバ 《権力》

清水卯一

「蓬萊波扁壺」

2000年 h30.1×w24.3×d24.3cm

次第に口の方へ向ってすぼまっていく形をした壺。真上からみるとその壺の口と全体の形状は、三角形の形になっていることがわかる。所々に鈍い金色の光を放つ、鉄釉を用いて窯変をみせる鉄耀の釉と、白釉とが掛け分けされ、その二つの釉葉の間に素地がシャープにはいる。この一段と濃く黒い素地は縦のラインになって作品を引き締めている。鉄釉の上に掛けられた白釉は斑になったり、鱗のようにひび割れし、そのひび割れの隙間に下地となった鉄釉の黒色が現れる。この白釉、素地、鉄耀をまたぎ、何本もの白釉の筋が波打つ白波のように横に走っている。

「鉄釉陶器」の優れた技術により、1985年に重要無形文化財保持者（人間国宝）に認定された清水卯一（1926-2004）は、古くからやきものが盛んな地、京都五条坂の陶磁器の卸問屋に生まれた。幼い頃より轆轤職人の仕事を間近に眺める日々を過ごし、自然とやきもの作りを意識していった清水は、14歳のときに作陶の道に進むことを決めると、立命館商業学校を2年で中退し、建築師であった叔父の勧めで、洛北八瀬の陶芸家石黒宗麿に入門する。戦時体制が強まる時代のなかにあって、石黒のもとに通った期間はわずか数ヶ月にすぎなかったが、その間に学んだ陶芸家としての姿勢は、以後の彼の作陶に大きな影響を与えることになる。

さて、清水はその後1941年に京都国立陶磁試験場の伝習生となり、日根野作三、水町和三郎、船津英二らに釉薬や図案の指導を受ける。ここで基礎的な釉薬の研究に取り組んだ後、京都市立工業試験場窯業部の助手として就職するが、2年後、終戦を迎えると試験場を辞職し、いよいよそれまで京都のやきものにない新しい作品を目指し、自宅の工房で作陶活動を始める。1955年頃には柿釉、油滴に優れた個性的な作風を確立。鉄釉の焼成は還元炎焼成が一般的であったときに、酸化炎での焼成にも成功し、新しい柿釉を誕生させた。

1970年、大気汚染防止法のために京都の市街地で登り窯が使えなくなると、それを機に清水は滋賀県志賀町（現・大津市）へ移り、若い頃からの念願であった登り窯・蓬萊窯を築く。以降、堰を切ったように新しい釉薬に挑戦して



いく。若い頃に石黒宗麿から学んだ、自分で材料を作るということへの憧れは彼の作陶におけるこだわりとなって、素地と釉薬のために工房の背後を取り囲む比良山系の山中を陶土や磁土、石を求めて探し回り、その発色を追求し、研究を重ねた。そして氷裂貫入の青磁、青白磁に近い釉薬の蓬萊黄、黄蓬萊など、釉薬や素地土の内部にあるものを導き出すように美しい色釉薬を作り出していくのである。轆轤にも独特の技術がみられ、使用する陶土のもち味を十分にいかせるよう、ゆるやかな轆轤の回転速度が心がけられたという。

本作のような、鉄耀の上に白釉をアクセントのようにつけた作品は、1987年の第34回日本伝統工芸展に出品された鉄耀白流の作品から見られる。次第に白釉の面積は大きくなり、そして白釉が生乾きのうちに上から指で文字や模様を拭き描く作品が展開していく。本作では、鉄釉の上に流れる白釉の筋がアクセントになっているが、土、それぞれの釉薬の質感の対比がお互いの魅力を引き立てる作品となっている。

（学芸員 佐野素子）

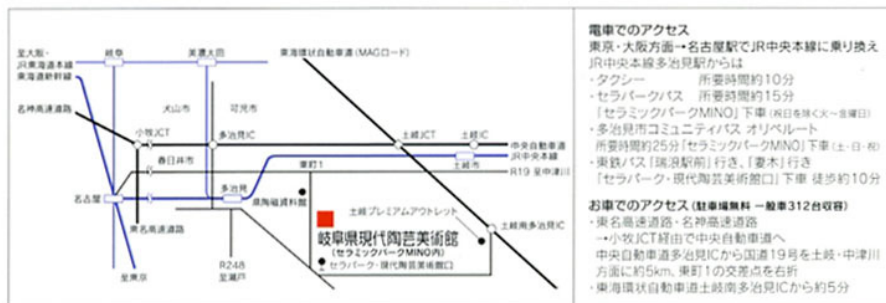


岐阜県現代陶芸美術館
Museum of Modern Ceramic Art, Gifu

〒507-0801 岐阜県多治見市東町4-2-5
tel.0572-28-3100 fax.0572-28-3101
http://www.cpm-gifu.jp/museum

開館時間

午前10:00～午後6:00（入館は午後5:30まで）



電車でのアクセス
東京・大阪方面→名古屋駅でJR中央本線に乗り換え
JR中央本線多治見駅からは
・タクシー 所要時間約10分
・セラパークバス 所要時間約15分
「セラミックパークMNO」下車（※日を除く火～金曜日）
・多治見市コミュニティバス オリベール
所要時間約25分「セラミックパークMNO」下車（土・日・祝）
・東鉄バス「瑞浪駅前」行き、「豊木」行き
「セラパーク・現代陶芸美術館」下車 徒歩約10分

お車でのアクセス（駐車場無料 一般車312台収容）

・東名高速道路・名神高速道路
→小牧JCT経由で中央自動車道へ
中央自動車道多治見ICから国道19号を土岐・中津川
方面に約5km、東町1の交差点を右折
・東海環状自動車道土岐南多治見ICから約5分